

## 日本人ボスの戸惑い

中村かおり（マレーシア在住日本語教師）

日本人で、マレーシア人を使う立場にいる人はけっこういる。日本料理店、バー、美容院などの経営者から、運送業や製造業など日系企業で働く人々。日本語を教えるのが本職の私だって、時にはマレーシア人に指示を出さなければならぬこともある。

しかしそんなとき、お互いの間に横たわる文化の壁が意外にも高いことに気付かされることがある。今日は、頭の中が「????」になったり、「やれやれ」と首を横に振りたくなる話を、独断と偏見を交えつつご紹介したい。

### ●欠勤の理由

マレーシア人を多く抱える日系企業にお勤めの K さん。小さな部署なので人のやりくりには常に気を遣っている。ところがある日、部下の一人が急に休ませてほしいと言い出した。「人手不足を知っているはずなのになぜ？」と問うたら、予想外の理由が返ってきた。

「父が呪われたんです」

絶句する K さんに彼は言葉を継いだ。「急いでお祓いに連れて行きたいのです。」他の社員にしわ寄せがいつてしまうのを恐れた K さんは、もう一度日を調整してくれるよう頼んだ。しかし今度は他のスタッフから予期せぬ反応が出た。

「ひどすぎる。お父さんが呪われているというのに、お休みをあげないなんて！」

…K さんにはもう選択の余地はなかった。

マレーシアでは今も変わらず精霊やお化けの

存在が信じられている。ある場所での交通事故の多さは樹の精霊の仕業だと大の大人が言い切るし、私のクラスの若い男の子でさえ眠れないのは何かに憑かれているからだと言って授業を休んでお祓いに行く。周囲の人々もそれを当然のこととして受け止めている。

そしてそれは職業としてもちゃんと成り立っている。原因不明の病気に悩まされている人や、誰かに呪いをかけられてしまったと見られる人は、そこへ行って神のお告げを聞いたり、祈禱師に自分の体に移り移って体内の憑き物と対話してもらったりしている。お金と引き替えに。

### ●みんなのものはボクのもの

日本語の期末試験中。「貸して」も「ありがとう」もなく、消しゴムが教室内を飛び交う。コロコロと床に落ちた消しゴムを拾い、「誰の？」と訊いたら全員が首をかしげた、なんてことは珍しくない。鉛筆や消しゴムは 1 度手を離れると、自分の手元に返ってこないこともよくある。これらは日本に比べると公共性の高い文房具なのだと言える。

ある日、同僚が VCD から録画した新作ドラマのビデオを貸してくれるという。全部で 12 本。ありがとうとはしゃぐ私に向かって、「空ビデオはいくらでもあるから」と彼女はにっこり笑った。聞くといくらでもあるという空ビデオは、職場の倉庫に並んでいるものではないか。

「会社のものじゃないの？」と慌てる私に、彼

女は「だから？」と少し困った顔をした。

その他にも職場では「みんなのもの」が紛失に似た勢いで消費される。買い置きのコーヒー、ペン、切手などなど。これらはいつでも誰でも「職場外でも業務に関係なくても」持っていいと解釈されているのではないかと思う。もし職場の外に勝手に持ち出されたりしたくなければ、「仕事以外で私的に消費されるべきものではない」という公共物の定義をちゃんと伝えてこちらの習慣を理解してもらわなければならない。それでもダメなら、鍵付きのロッカーにでも入れて、署名しなければ使えないような強硬手段に出る必要があるだろう。

強調しておきたいのは、これらが悪意をもって流用されたり転売されたりする場合はきわめて少ないということ。あくまでも公共物の定義の違いであるのだから、「誰の？」と訊くこと自体が実は間違っているのかもしれない。

● ハッターは大きいほどいい？

美容院を経営するNさん。新しく美容院を開くために、マレーシア人の美容師を募集したが、応募は予想を超えて多かった。マレーシアでは数ヶ月の研修で美容師の資格が取れるため、日本の美容師並の技術を習得するためには現場で経験を積むしかないことは承知していた。しかし、これだけの応募だ。経験者も多くいるだろうと期待に胸を膨らませて面接に臨んだ。面接をしてみると、中には短期間の研修すら受けたことのない人が数名。なぜここに？ しかしその彼は自信たっぷりに言っていた。「私はシャンプーができます。実は伯母が美容院をやっ

てまして…。」なるほど。資格はなかったが、そこで手伝いをしていたというわけか。

「いいえ。手伝ったことはないんです」

じゃあなぜ、シャンプーができるのだね？

「毎日自分の髪を洗っていますから」

「はいっ、どーもお疲れさまでしたあ」

謙遜を美学とする日本とは対照的なエピソードだが、こと仕事になると「できる、できる。大丈夫」な人が増えてくる。日本では〈できるうちに入らない〉ことでさえも、堂々と「できます！」と言い切ってしまう。しかし未来形だと考えればまるっきり嘘でもない。〈今、いい仕事ができるか〉なんて誰も訊いてはいないのだから、最初は十分な成果を上げられないのは当然。やっていくうちに上手になればいい。「できます！」と自信を持って言うのは、そのチャンスを得るには必要な宣言で、この中には（何年後にできるようになる可能性があり、私はその努力を惜しみません）という意味が多分に含まれているはず。そしてそのやる気と可能性を見抜くのは、雇用側の責任になるのである。

これらはもちろんすべてのマレーシア人にあてはまる話ではないし、あくまでもこういった傾向があるという程度のものだ。反対に、私みたいにここで暮らしている日本人の中にも、お祓いに行ってみようという気になったり、無自覚に「できる」と言ったりする人がいる。そんな日本人の予想外の行動が、実は最も日本人ボスを戸惑わせているのかもしれない。

(ホームページ『クアラルンプール通信』  
<http://saga.cool.ne.jp/manggis/>より一部転用)